コウベギク Senecio paludosusについて

横　山　雅　一

はじめに（発見の経緯）

昭和54年5月，兵庫県加古川市野口町にあるグランド内で，見なれないレモン・イエローの小花をつけたキク科植物を発見。花色の鮮明さ，多くの枝を分け，こんもりとした草姿，線形の葉は印象的であった。

図1　コウベギクの生育状況を示す

グランド内はススキやノイバラを圧倒するばかりにブタナが黄金の絨毯をしきつめ，一角にはイヌコモチナデシコがピンクの霞をたなびかせるように生育していた。ここではニワゼキショウも青，紅，白のほかにキバナニワゼキショウが混生していた。

この年以後このレモン・イエローの花 *Senecio sp.* 観察のため，毎年この地を訪ねている。この土地は粘土質でやせているためか，個体数はあまりふえていない。自宅に移植したものは，環境が適したのか驚くほどの生長（現地では高さ20*cm*内外，自宅では40～50*cm*）で，冬の1～2月も常緑で次々と開花，結実，発芽。つまり周年開花，結実，発芽という特徴を示した。

昭和58年8月，神戸大丸での鑑定会に *Senecio sp.* が持ちこまれたとの話を聞き，同年9月に神戸市北区山の街の団地を訪ね，六甲山系に接する造成地一帯に広く群生しているのを確認。ここは六甲山系の北で厳しい寒さの山間部のため，冬は地上部が枯れたりで，ほとんど種子により繁殖しているようであった。そのためか花期は5～11月に限定されている。

私の知った第三の群生地は，ミニバイクで淡路島をツーリング中，津名郡阿那賀丸山のゴルフ場跡である。昭和59年5月，初夏の日ざしの中，レモン・イエローの *Senecio sp.* の花がまばゆく映ったものである。

種の同定について

Senecio sp. を発見した当時から，花の特徴を見てSenecio属のものとわかったが，種名の同定がなかなかできなかった。

藤本義昭氏をとおして，京都大学の小山博滋先生に鑑定をお願いしたところ，“京大にも同一物を栽培している。Senecio属は全世界に種類も多く，原産地がわからないと同定できない。”というような返事をいただいた。

図2　コウベギクの花

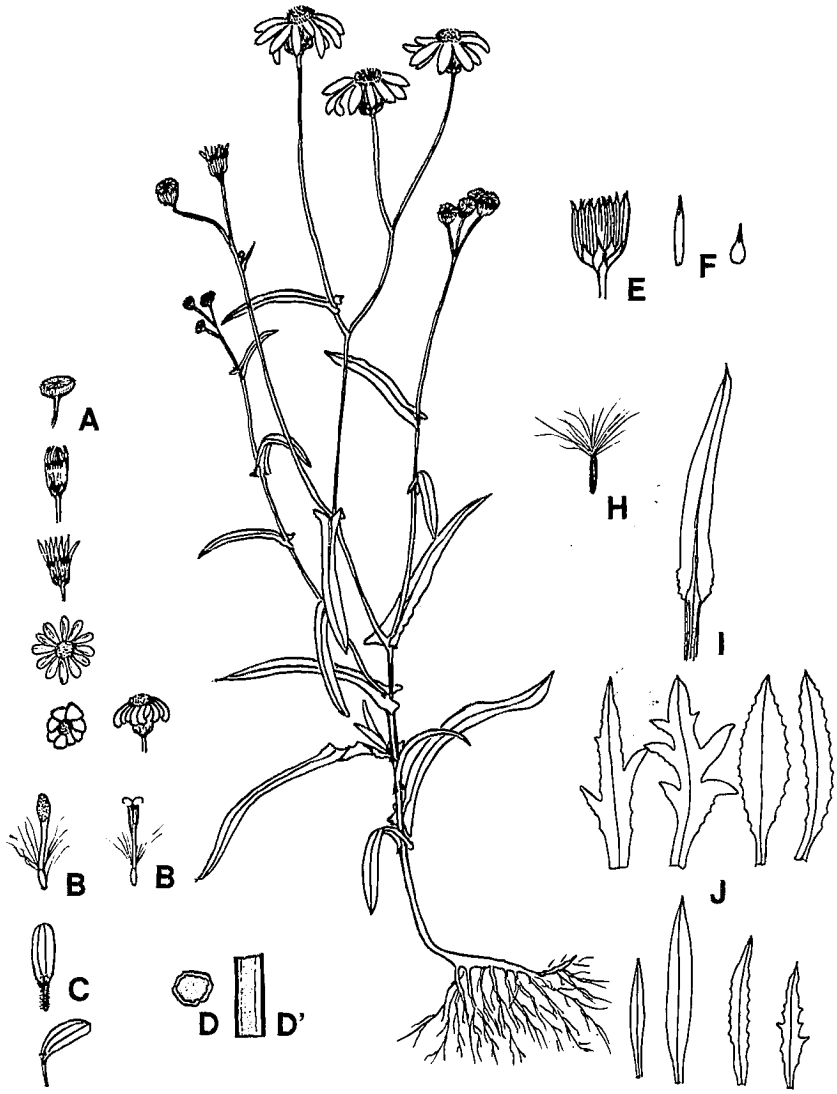
また帰化植物図鑑の著者，長田武正先生に問い合せたが，“日本では未見のもの”という返事。

神戸市北区の群生地は，現在も開発，施工中であり，緑化工事の施工業者は本洲緑化K.K.であることを突きとめ，大阪の本社まで何度も足を運んで，タキイ種苗から買い入れたヨーロッパとアメリカ産の混合種で施工したことを聞き出した。

そうしたとき，コリンズの“Wild Flowers”の中に *Senecio paludosus* があり，非常に酷似しているので，長田先生，藤本氏のご意見も聞き，他の文献にも目をとおし，このレモン・イエローの花を *Senecio paludosus* と同定した。

和名について

四季を通して，レモン・イエローの明るい花。港をひかえ，山の緑に映える明るい街，神戸。そして一大群生地が神戸にあることなどを考慮し，長田先生のご意見をとりいれ，*Senecio plaudosus* を“コウベギク”と命名することにした。



図解

A　頭状花

B　筒状花

C　舌状花

D　茎の切り口

E　茎の断面

F　総　包

G　内総包片

H　果　実

I　葉の裏面

J　下方の葉の変化

図3　コウベギク(*Senecio paludosus*)の全形

コウベギクの特徴

多年草。茎の高さ20～50*cm*，茎には数個の稜がある。また赤褐色の条斑，ときに全体が赤褐色のものもみられる。

葉は互生し，下方のものは線形，長楕円形。または羽状に深裂。大小不同の鋸歯があり，基部は茎を抱く。

頭状花は鮮黄色（レモン・イエロー），径2～2.5*cm*舌状花は15個以内。

神戸市内等南面した低地（標高200*m*以下）では常緑で周年開花，結実，発芽をし，繁殖力は旺盛，むしろ夏季の乾燥に弱いぐらいである。また山の街（標高600*m*）のように冬期の寒さの厳しい条件では土壌も凍結するなどからか，枯死し，翌年落下した種子から発芽生長するのが見られる。

種子は1㎜と小さく長い冠毛を持つので，風に飛ばされ，今後各地で見られるようになると思われる。

本稿をまとめるにあたり，いろいろご指導くださいました長田武正先生，藤本義昭氏に厚くお礼申しあげます。

※　神戸市東灘郵便局勤務